

『連載』『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

【第十六回】江戸後期の日本を覚醒させた

がもうくんべい
蒲生君平



蒲生君平 (1768-1813)

東京大学名誉教授 月尾嘉男

寛政の三奇人

江戸時代後期の一七〇〇年代後半には、江戸三大大火とされる明和の大火（一七七二）や全国に飢饉が発生する原因となった浅間

山噴火（一七八三）など巨大な災害が頻発し、その影響もあって幕府の老中が田沼意次から松平定信に交替するという政治体制の変化も発生した。さらにロシアのA・ラクスマンを船長とする帆船エカテリーナが根室に到来（一七九二）するなど、鎖国社会への激震

が噴出した時期でもあった（図1）。

そのような時代の変化に対応して社会改革を目指して活動したのが林子平（一七三八―九三）、高山彦九郎（一七四七―九三）、蒲生君平の「寛政の三奇人」といわれる人物である。奇人変人という言葉もあるように、現在では奇人は奇矯な人間という意味に解釈されるが、当時は世間の行動規範や風俗風習などにおいて一般の世人とは相違した活動をする優秀な人物を意味する言葉であった。この三



図2 林子平 (1738-93)

人の奇人が目指したのは王政復古である。

林子平

（図2）は



図1 根室に來航したラクスマン (1792)

一七三八（元文三）年に幕臣の岡村良通の次男として江戸で誕生したが、良通は子平が三歳になったときに浪人となり、全国を放浪するようになった。そこで子平は叔父で医師であった岡村從吾に養育され、実兄の友諒が仙台藩士として仙台に移住したときに一緒に移住した。そこを拠点として蝦夷の松前から九州の長崎まで全国を行脚し、外国、とりわけロシアの帆船が接触してくる実態を目撃した。その脅威を警告する目的で『三國通覽図説』（一七八五）（図3）や『海国兵談』（一七八六）

図3 三國通覧図説 (1785)



を執筆して海防の必要を警告したが、幕府以外の人間が海防を論議することは禁止されていたため出版してくる版元はなく、大量の誌面の版木を

自身で刻字し自費で出版した。当然のこととして両書とも発禁処分になるとともに版木も没収され、仙台の実兄の屋敷に蟄居することになり、一七九三（寛政五）年に五六歳で死去した。

高山彦九郎（図4）は一七四七（延享四）年に上野国細谷村（群馬県太田市）の郷士の



図4 高山彦九郎 (1747-93) 御所の方向に遥拝し

高山彦八正教の次男として誕生し、一三歳になったときに南北朝時代を舞台とする軍記物語『太平記』を読了して勤皇を信奉するようになった。一八歳になり京都に出奔して多数の公家と交友し、とりわけ第一一九代光格天皇に近侍していた中山愛親と交友し、関西一帯の南朝の遺跡を訪問するが、母親が病死したことを契機に一旦、帰郷した。

母親の死後、一七七三（安永二）年から九州の久留米で自死する一七九三（寛政五）年の期間、津軽半島から薩摩半島まで日本全国を旅行し、三五冊

にもなる旅行日記を記録している。一七

七四（安永三）年に

京都に到着したとき、

三条大橋に正座して

御所の方向に遥拝し

図5 高山彦九郎坐像（京都三条大橋）



たことは有名で、現在、その場所には坐像が設置されている（図5）。そして王政復古に尽力するが期待するよ

うな展開にはならず、九州の旅先で自死した。

尊王攘夷思想を信奉

上記の二人が活動した時期から約二〇年が経過した時期に、二人の意思を継承するかのように登場したのが蒲生君平である。戦国時代から安土桃山時代にかけて、近江日野城主、伊勢松坂城主として活動してから陸奥黒川城主として活躍した蒲生氏郷というキリシタン大名が存在する。織田信長に寵愛されて次女

と結婚、秀吉にも重用されて会津若松九万石の城主となり、茶人の利休の弟子の七哲の一人とされる人物である。

その嫡男の秀行は父親の急死により一五九五（文祿四）年に一三歳で家督を継承、徳川家康の三女の振姫と結婚したが、家内不穏を理由に秀吉の命令により宇都宮一八万石に移封された。その子孫が一七六八（明和五）年に誕生した蒲生君平で、父親は町民であった。しかし祖母から祖先は蒲生氏郷であると教育されて学問で立身出世しようと決意し、最初は近所の寺院の住職から指導され、さらに鹿沼在住の儒者の鈴木石橋から学問を教授された。

以後は頻繁に水戸を訪問し、『大日本史』の編纂に関与した水戸藩儒学者の藤田幽谷にも師事している。君平の尊王攘夷思想を信奉する人生の発端である。二一歳になって江戸に移動して多数の学者と交流し、一七九〇（寛

政二）年には奥州地方を旅行していた高山彦九郎に出会い、さらに帰路には仙台城下に生活していた林子平を訪問するが、君平が粗末な服装であったため軽蔑され、会談は決裂したという逸話が伝承されている。

天皇の御陵の調査

一七九二（寛政四）年に、冒頭に紹介したロシアの帆船エカテリーナがA・ラクスマンを使節として根室に入港したという情報を入手した君平は手薄な北方防備を憂慮し、一七九五（寛政七）年に再度、陸奥への旅行に出發する。異国の船舶の到来では一八五三（嘉永六）年のM・ペリーの指揮するアメリカの四隻の軍艦が浦賀に來航した騒動が有名であるが、それよりも六〇年近く以前に発生した北方からの開国要請の圧力に敏感に反応した

のである。

その途上では大原吞響や藤原知明など尊王攘夷を主張し、北方防備の必要を主張する何人かの学者と出會って意見交換し、帰路には会津に立寄って祖先の蒲生氏郷や蒲生帶刀の墓所に参詣して江戸に帰還した。その翌年の一七九六（寛政八）年には京都に出向いて一帯に存在する天皇の御陵を調査し、さらに一七九九（寛政一一）年には京都へ再度旅行し、大坂から奈良一帯にある天皇御陵をすべて踏査し、帰路には伊勢松坂で本居宣長と面会している。

そこから佐渡へと移動し、一二二一（承久三）年に発生した鎌倉幕府の執権の北条義時との抗争である承久の乱に関与して佐渡に配流されて崩御された順徳天皇の御陵へ参拝した。さらに友人である僧侶の良寿の遺骨を携帯して天の橋立まで旅行し、散骨したという

逸話もある。この長旅で疲労困憊^{こんぱい}し、江戸へ帰還してから宇都宮の師匠に挨拶に出掛けたが、その師匠が君平について、疲労困憊して挨拶に立寄ったと記録しているほどであった。

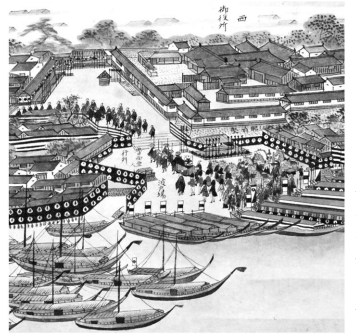
北方の脅威への対策を検討

一八〇〇（寛政一二）年に江戸へ帰還し、駒込の吉祥寺近くに「修静庵」という私塾を開催して弟子に講義をして生活するが、弟子からの月謝だけでは十分な収入にはならず貧困生活であった。それにもかかわらず、関西地方で訪問した歴代天皇の御陵が荒廃している状況を書籍『山稜志^{やまらぎし}』として執筆し、一八〇八（文化五）年に出版した。その書籍で御陵の形状を「前方後円」と表記し、それが現在も使用されている用語の起源となっている。さらに一八一〇（文化七）年に『職官志^{しよくわんし}』

を出版するが、これは当時の官僚制度を奈良時代の官職制度に復古させることを主張した内容で、第一一九代の光格天皇も閲覧するが、徳川幕府の朝廷への対応を批判することを意味する内容のため、江戸の奉行から事情聴取されている。しかし、それを不服として、さらに『憤記』を出版して騒動になるが、幕府の行政に関与していた儒学者林述斎^{じんせさい}が弁明してくれたことにより大事にはならなかった。

このような幕府と朝廷の関係が複雑になる一方、前述のように北方からの脅威は急速に増大しはじめ、一八〇四（文化元）年九月にはN・レザノフを隊長とするロシアの軍艦が日本人漂流民の送還という名目でロシア皇帝アレクサンドル一世の親書を携帯して長崎に到来して翌年四月まで滞在した（図6）。さらに一八〇七（文化四）年になると択捉島や利尻島にもロシアの帆船が到来する事態とな

図6 レザノフの日本来航（1804）



り、北方の防備も重要な政策となった。

そこで君平は北方からの脅威に対抗する防備を構想し、その内容を一八〇七

（文化四）年に『不恤緯』という冊子にして、老中の松平信明や土井利厚など数人の幕閣に献上した。その内容は徳川幕府の幕藩体制という分権制度では外敵に対応することは困難であるため、統一国家に移行することが必要であるという意見である。見識があるとはいえ幕府の人間ではない私人が幕政に意見を具申することを警戒され、君平は閑居させられることになる。

大望を実現できずに逝去

偶然ではあるが、その時期に故郷の宇都宮に在住する母親が病気になったという連絡があり、帰郷して母親を看病しながら、『職官志』を執筆することになった。恩師の一人である鈴木石橋の援助によって刊行された書籍は朝廷が日本を支配していた幕藩体制以前の統一国家時代の官職、官位、階級、官制など国家の体制である律令制度を解説した内容で、君平が主張してきた律令国家を実現するための基礎資料を用意したことになる。

しかし、君平の構想は雄大であり、既刊の『山稜志』『職官志』の二冊以外に『神祇志』『氏族志』『服章志』『礼儀志』『民志』『刑志』『兵志』の七冊を発刊し、日本の古代からの国家制度を明確にし、それを再興しようという意

図7 蒲生君平顕彰碑（二荒山神社）



しれないが、そのような思想を醸成した背景は二〇〇年以上も平安であった鎖国

図であった。多額の借財を背負いながら自身が理想とする国家の体制を実現したいという一念で最初の二冊を刊行したが、一八一三（文化一〇）年に赤痢に罹患し、四六歳で病死し、東京都江東区にある臨江寺に埋葬された。

臨終の言葉は「俺を思うならば、俺の意志を読み、俺の生事の労を想え」という執念を表現する内容であった。その意志は明治時代になって天皇親政の国家体制の復興に貢献したと顕彰され、一八六九（明治二）年には明治天皇の勅命により、宇都宮市に「蒲生君平勅旌碑」が建立され、一八八九（明治二二）年には宇都宮二荒山神社の境内に「蒲生君平顕彰碑」が建立されている（図7）。そして一八八一（明治一四）年には正四位が贈位された。

ここまで紹介した経歴だけでは単純な天皇至上主義を信奉した人物と理解されるかも

社会に様々な外圧が切迫してきた危機意識である。単純に現在と比較するのは困難であるが、戦後八〇年目の節目にある現在の日本も人口減少、経済停滞などの内圧と国際政治や世界経済の外圧が切迫している。そのような視点からも蒲生君平を見直す時期である。

つぎおよしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。趣味はカヤックとクロスカントリースキー。著書は『縮小文明の展望』『先住民族の観智』『転換日本』『凛々たる人生』『爽快なる人生』『意志ある人生』など多数。